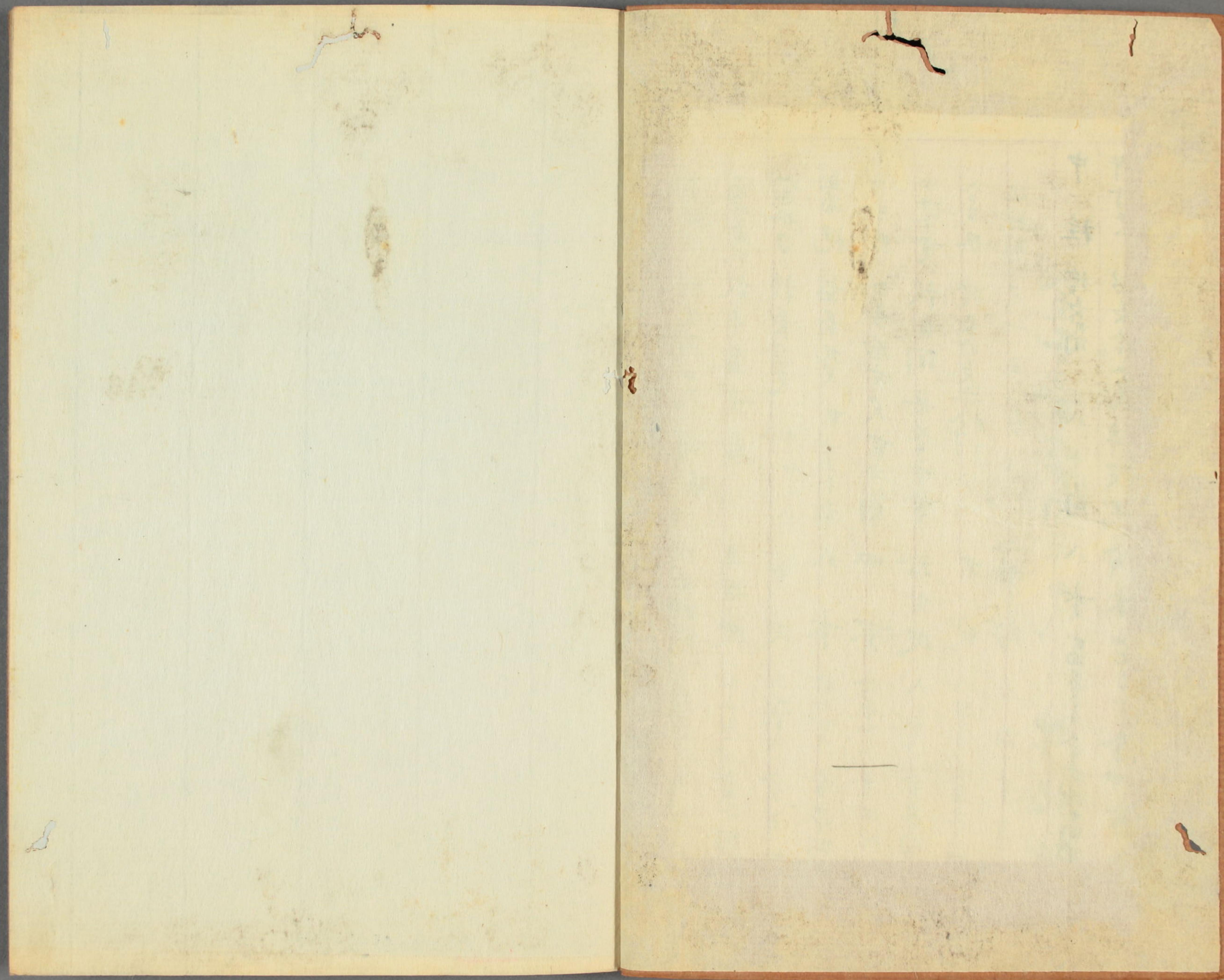


9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

JAPAN



早稲田大学
文学部図書

45-10478

秘注證略七部集卷之二



主乃口の手札

聞きと人との戸ねきあひて衆向の方り
りの所舟浮つゝ草木は並ねの方見え
海のとも多ひ重五、技新とくづく勝地やと
近きよきすけちのまこと思ひかゆ

一年の歌の歌ひよつまうに船せうよ春ハ、水端
あくと葉をうらうとあくと

主 うやんさよの作易事、荷子
はやすのや、歌自らのやう。一句の字在、以不
據うふ今う

作多きにちる中るたりこれ

重五

チ源休ニテ伊勢事とイフヨリ振内全義ニシテ荒
神ノ馬ト言ヲ念ナシモ事ハ松文也

山裏むし月一吟ノ 館立て 雨桐

桃ニ山の桜也月一時トハ未ニ有フより其處ニテ
トハ錦ノ事ニテあく鳥ヲ松木ヲ連フ併ニ三十二タリ
ホク連ト言ニ大善精ノ侍ヲヒカセタリ

鐘手トの火アリアムニシキ 李風

西とイフヲ誓符トイフニトリテ信城或ハ嘗ナトキツキ着
請ノサニラ沐タリ但面無ハ信長若濃近附体度云
苗原ノ石垣山ノ信著清ヲ可

汝風小よ／＼すハ鷗 あく

火ニ有ルトイフニキサアレハ汝風トニカセ平家ノ軍兵
ノ面氣ヲ言アリ鷗ノ声ヲ済キノ寄キトロ舟はゆリ
矣ノアレト跨ま葉竹ニ但ヨリアマハト言詠勝
怪云体ナリ

墨アリリ沖ノ呑毛くアムニ 梅角

前々ニ波瀬主トニテ墨ニ白セ其端ノ際ヌニカサニ也

湧磨アリリ汗の唯子経フン 重五

ちタヨニタニタニナシ松子の會アヒシタリ

名 —— 涼 菊花少く又く 荷弓

カラニテニカヘトナシテ敷盤ノ首ヲ然ニ青色ノ菊ヲ

イヌイクナリミモ一章ノ後也

文王の母よりても之はれて 李風

太極タリ前ノ角ヨ音響ノ角トナレ因ヲ度セ
ナシメタ周ノ文王嘉ニ連ニ人ヲ詔カサレトモ其純ヲ
仰ナ民歌キテ城邑セリ

弓の矢ト乃角の矢と 叫 雨翁

文王の母四十日立日ノ風靡ニ五穀熟之
角ナキ竹トハ初冬をクジカレノ邪ニテラムナリ
如きくつねハ骨粉もくせよ 荷芋
前々が化ニヤニモトス記タラ得タリ骨ヲホト
クトル石シテは早トトイフ早リ

御傳歌をうしくん 王貳 昌主

初冬ニタルヒニタニ御傳歌ナト産タル丸ノ人食

セシト慶エ作フイヘリ但れモニ有網トヒニカセタリ

音はよ後リ人へのうけ梅》 雨翁

芦竹ニフル却而ト附タリ玉爾ト高モアハ事実ノ

ゆる後ア後ス事情モアリ

ワヤノノとゆニ神玉ハく星 重五

祁寢ニタリ人ノ物ト言ヨリワヤノト大始ヲ

ニカセタリ

弓筋ト手足を細くの砂りにて 昌主

落津三十二一章也

毛虫虫男の疾きあくまし

李風

前々二月一束、附テ尚又は附モカラニテ二月一束

柳と見ゆるをこゝよ勧めきや
二夕一春事トニスル故ニ亦誠爲ラ歎ス体タリ(但長男ノ)
言語ヨリ子供ノイハシ詞ヨ述タリはウハ必竟人鳥居
句ニ附タルト同有之ニシテヲニタニ可見

入
ノヨリ陳ソハ
柳あ院の如クノ日と葉入りのラメヤカナル白コ可見
ラウラウと轟キ
キモモ延命
スル
入カル日ニ連ゆト心ノセガル、伴ハ文ニ急シト嘉ニウツ
カリトヒキタリ季ノ移シむヨシ

紅樓夢
樟草堂
雨桐

まろくとまわせ仰て樟ノ張面シウツカリト言ニテア居
ルトニキ

事の本り、窓口、川へうつしきて
雨網
高橋の計遠とおとアモロ、毛毛正清マモヒラシキ、
カケテイトモカレコキト言ニラツムキハニ、キナリ
の計も見えぬ
重五

ノノウツキタルトイフコモアノアトニテアラノ海ーサノ
今夜シタリハタレノ社ノニ卫又トハナチシノ叶ナカラ
門内ノ敷石ノ上ヨモミルヘシ

絶対に立腐れ立小もき立う 昌主
前タラ少者ノ便トニテ附タリ田面ニ立る葉ニ

痴件立ナリ 桜立ナリ 垂風

竹子ニシガウ立腐ニタリ石ケルト立ニ表ヒニキニ
自次ノ府時ニ同心防ノ事ニタルヘシ

絶対に立腐れ立小もき立う 重五

木ト立ナリ移一テナレル希ノ木ヲ壹物ニ彌(ミル)
サ浮(ハ)待ナ可思望ノ波(ハ)れと年(ハ)ニアリ

ああと桜の名よ呼る由 無

前夕人有ら来トイワニ時鐵矢橋立ヘシ但此情ニ

今の人あらよあらゆの間よ 垂風

且傷ノ隣ナリ名ナリトイフニ知ニルトニキ也

絶対に立腐れ立小もき立う 雨相

毛羽和羽ノ立小もき立う 薄雲

ニ白カラニ也今之情ニ追シ止也但此無トハ伊智也

西行翁トイフ立テ尼寺ニ白カラテ波ナリ

絶対に立腐れ立小もき立う 昌主

二十一章也トニテ桑つノ山位トニテ附タリ但金精ニハ西行
ルニヘソリトシテ桑の葉を多は自れ
日よもやまの桑

世よりりぬ局用ヌトキテ て 有納
者ニカガラニ也

詠多々トシテ 云承の彦細 重立

局ノ修業ヲ後家トミタリ 芦細心ナニ但春ク
言ハ老ノ體寒ハ芦ノ葉ニ似メリトセシカ

シテモト想と行ひて毛リ

サカニ鳳山ノ毛竹ハ淡雅ニ莊々した花ニ枝繁花心ヲ
竹トハ毛リ年ニ花ニウカニ寄リタカレクトイフナリ

足も背も毛リモ ゆく 東風
毛カレクト吉田ニスカリ花ト竹トニツア見ヤカニカセ
テニカ一章トハナセタリ

三月六日

毛リ毛ヤ脚チ山の八事移 且葉

至高トハ南都ノ人口繁盛寺ノ上之山ニ伏見後ス竹豆テ
山ノハ草ニ至リタルヲ言カセタリ

脚チ山の毛リの邊 所も

歩涉多ヒ至ルハ後高キアニテ邊ノ声モえし但無多
鐘ハ社ニアテス入相ノ邊ハ秋ナリほヨリ見度ニタルヲ面白
フ霞トウケタリ

肴り猿あらわすとん 神若て おう
面白つと言ふ者ノ福トハ白ナリ旅人ノ旅面白ニウカヒテ月
日モ是ニテ神若テ人ノ行カラコミテ上己ノ節勾テ
三ツトロサセキトノ言ナリ

口すくつきの ほり 犬人

移舟テハ正反仰アハロモスヒ白セタリ

寒風よ御きる 桜の湯の歌 琴音
ロスシト言ニ酒ノ醉トヒカセ清少ナ萬葉ニ生風令歌是
但寒風ニ御レストハ一句ノヨカシニナリ

寒風よ御きる 桜の湯の歌 琴音
寒風ノイカシク吹待ミヨリ寒林ノ所ナル秋月ヨコホシ
名ハ巻中ノ曲第ナリ

星白毛左琴音歌トヨウテ 須水

日ニ星白キトヒキ 曲ニ重複テタリ寒ニ薄テネリ五絃
音ハ九月十二日也

菊あくに極りよりよしとて多 星素

暖床ト松鷹ニヌタルニ星白キト言ニヨイムヒニキ

表阿彌より二人娘利ん 犬人

ムスコノ娘志を尼タケ老ノ生婦ヒテ菊之臣ニト言ニ
隠居アラガムヒ侍ヲ白セタリ

吹ソクイ一車ハくとー 芳芳

セナリキミフ吹ニテ聲利シト言トニテヤコトナキノ師ノ
華送ヨ思ヒ寄ナリ

轄角アラヘチ木津の町入ユク 旦暮

車ヨリ牛ノ荷車ト輕シテ御タリ但籠ハ柳前ノ名也
御手術をハ白石塗御面ニテ左陣へ右ヘニ

行ヤドミシルニホウシの左陣　那人

ニウカニ也籠更ニシム人ノ玉ノモニテ御面也

福衣アモモクジハ御物也　人皆是
高士大君アハ御物ハ五種有シ外此れ入はドア
着用法多シハ万リの也ト　野水

旅人食事は皆ハ夷向ノ路余ト降タリ但至多ノ

ロリト言ニ終たる人トハヒキニ但多ノ候ヨシ

里人ナサ摩以北ハ　林の也

秀日系ノ人ニ施コモニテ鐵角ノ内装之但路倒スト言

舟形舟と浪打ノ高島の也　橋　羽笠

雨具ニ施タルヨモヨ機羅ニテ高島ノヨモナシタリ但百日
一日一宇ニ月ノ字ノ夫城ハ二行書、樹モアントソガレ共
今ハ用ス但ニ句カラニテ出水ノ城向ヨリ月十キ海トハ言リ

支那の木子舟の根ヨモクの鉛シモ　跡也

主名主格ト吉ニコロニタルト言ナヒキニニ句カラニ也

波ハ空船も舟の波也　山　鳥糞

高島ノ波芦今ヤウ便ノ件ナハ浪ヒテセルトイフテ
高一季トナシメリ

ビトナトヤ筋スルの故行路ウキ 犬人

洛泉山のへ込ラ筋駆ア故行路ト食ア致シタリ
訊イモセニト言ナトケレヤハニキ也筋モテ後行
路ナド人ナシれハモクノ風俗カリタルト言事也

四 仰マテ横メテ伏シの眉の毫 荷芋

荷向ノ後声ニ雲上ヒ故内侍ト言孤向記シ蘿葉年
賀リサニノ侍是ヨリ物好ノ眉ノ事ヲ言リ
白の御事ト軍の中ハ斤力きに 羽笠

四 侍ト言ヨウ白當ノロ侍ヲ思ラ寄義良而影ヲ
附メリ

筋も晴翠と筋くま一上 サカ

ニタニ意波也陣立ノ酒毒晴翠至室ニ デート言ハニ
ニタノ蓮ニヨルシタルナリ

大年ハニ御渴渴了魚也ヒ 枝 具葉

勝繁ト云ヨリ育御ノニ度度清様御名の有セテ大年
孤向ヲ立タリ但幕ト言ニ文育ノ事コトノヘテ更ニ
念仏唱フトハ言リ

よりぬちもよしを滿タリ 犬人

経タガムシのるよ納紀極て 荷芋

ヨキ隨ト云ヨリ極根ニクコラ極タリトニテ古リニ盜ニ
ラサルニミテヨタリ但々ハ隠者ノ極ナルヘシ

宮古リナリナリナリモニ春の物 羽笠

羽笠

朝タノ詠巻便
早キカト自慢ニタル句ナリ

毛多取シテ衣ハるシテ身アリ也　碧水
麦ノ粉シタル即人ト鶴ヒテ起シ附タリ麦ノ粉ト青ニ馬
絆トハヒキナリ

ニハ魔多シテ身アリモテの内　且葉
一社カルトイフニ對シテコハト言リ但コハトハ是ハト吉觀也
但ニタニ意也　魂氣ノコト　精思徑ニ立テ四度ニアリ春ニ二月
十五日寅ノ時魔束テ十六日午ノ時帰ル余ハ略之

陽ちのあえ候　生ノ席テ　誠人
麻勺ヲ先ノ業トシテ陽安ノモ工所ノタル事ノ支拂
ニシテ此残り居ルト吉冠辟ニハナニタリ

東白　神ト　一言耳　荷斧

舊ニテノ遠カケノ姿アルヨリ秋ノ聲ヲ紀シ　深々ハ長
寿ノ音コ呂テ福ナト　湯タルトシテ難有潤ヲ春モ
神トハ修タリ

田を耕スメ十日アノアヌ　足ニ付キタリ　相望

前々物歸タル　併豆ヨリ田ヲ持ノ五文字ニ立初ニ不足ナリ
ナリ冬心ヲ花見ル里ニ生ケリト作リタリ　花見ノ語ニラク
頃サダル白也

力ノ筋をほし　——中のよ　碧水

前々ニ不足ナキと足ヨリ又イサヒカ不足ノロヨヒ世中ノ
人情ヲ此タリ　愁便ニカノ筋ナキヲ不足ニシタリ

連続ヤニ升のあらゆの隠タリ　旦暮

力ノ筋ト言ヨリニ升ノ衆達ヤニモスレハ干戈ヲ動ス羌ニ
シキツラ思ヒヨセタリ

る仕のうを 真の山

武人

高幸ニ大号ヨリ高松ノ詞ニツキ近シトハナレタリ

三月十六日旦暮東田家より解りて

轄のこすりてゆきと轄を代

野

タミハサカケルを事アシマスドリ御重リハモテハ
ヤスト言フ也明定ル事ニシテ面白ヒト且蓑立對シテ所
水ロ接枚ニ但エニシキト言フ色セヨニモテハヤスフニシ高
トニイセシキト四ニナカフト言フ

歌はあくまむ事のゆ

蓑水ロ接枚ヲ變テ且蓑カ早トニ免腸也極ニ向接
子サメニ歌ト言フチ添タリ

巖立る黒木の鳥キ若さうりて

武人

奥

夷泉ト見テ巴郡ヲ附テ岩本ハ伊冥ニテ西云丹リ言
物ト同シ故玉ニタシ此陽方海勝ニテカラニシルサニ也

すりへんばくする事のゆ

荷芋

立てて余波の舟の舟ナリ

毛文

毛毛に船する舟ノ舟ニホナリ立ててあゝ間希タノ一停
ヒキタリ但馬ハ何程肝生ノ歎キラニテモ舟ニ無テハ
至テ静た考也ニテノ人ヲ見ヘト言ヨリ舟ニ無キも
所妙也

芦の鶴をする傘の鶴

鶴

二弓カラニテ一弓トホタリ立テ葉ト言ニ今ノ形容目矣
出本ササノ鶴ノ鶴也

瑞降りし鶴鶴の鳴の鳴りて

旦暮

前々二事也トニタル故ニ又水色ヲ体タリ但油燈
シタリ芦ノ役ノ出益テ油者ヲ僧ノ立並テ居ル葉形
窓セリ但今ニ集ルハヒキ也

宿乃向ナリ 舞久ゆる 里 琴名

ニヨカウミタル傳之職セテノ持セカキノ施主ハ僧ヲ持
タル人トシテ其の揚ヨ定メタリ

雨の日も難 槍劍多ん 檜扇 荷弓

前々一途クニニ所ノ寺タクシテノ御跡御前ヨ御ノ
ロア島ト云ハ居候ト伊勢の弓の由申ニヨ島ニテ小鍬ヲ
持行ナリ

むくとくのも極め一リよ 破人

而の旅ノ終ノ計ニあら御事ヲ持タリトハヒトム
チノ心ニテ其トシト言心ナリ

琴久の坊主ハ住處難却て 舞久

前々語承ヒモニキドアラハ上品ノ人ナラニニタルヤト已
ハ下様ノ人トニテ同心坊主ニ一飯ヲ乞シト尋ねニ折
エク曰主セト言附ナリ

翁子やおうん枝 櫛の本 多文

段ナリて己ハアタクコ見テタルニ後室ノ庭松
ナトニ植シテ是ヲ養えり初木ヘ又子ノ内ソニリテ
解テヤ至シ其後ニ接見んトタスライタル佈、海セタリ

と音ハ主ニテヤシナ

因十九日荷方宣示セ

咲子の事あはつ御可に立候セ 試人

其萬ノ脚ナカウひち仙ヲニ第ニ眞打スルヨ望命、御
望ナリ前々ノねフサセトニ後ニタケツコ横マト言付ニ

秋以和而り 之原 順昌

且葉

美合ト云詞ニ書きて源頃カ和多抄ニ萬物ノあ
類ヨ書合タルニ禁タリ是ラヨ白トモ言セラ後ニカル
詞又移也

初丁の御よもうト火をすぬ

呂文
皆國ノ種ナカラ前々ハ物寂々ル伴ヨリ火ヨリナヒ
ミカリタルヲ禁タリ但火キハ多莫ノ人モ禁ナヒ
日和子ノ種宿ノ故事モアリ

別の内より洞あとりや

荷方

族人ノ在處ニ煙竹ナト香体ル伴ロシテ主ニ就石ノ般
蟹海螺ノ別フ思ニ多テ其ノ心ナキヲ言シトテ
後アラハセトト知ナリ

既久ひれの宮うへ夜宿え

且葉

前鳥コ福立コ甚不人ニヨリ詞トニテ四ノ童山ニ日枝ニ井
寺ナトヘ行別ニ除ナシナリ但改ソ花火ノ詫ノ都
花卷ノ都ト言之ニ四ノ宮ハ京トスルノ間ニテ
比敷ニ井寺ニ登道也唐臨ハ更醫ノ聲也

まゆり石のね三もむづく

脚名

前勺ノ因空伴ソリ主ニ宿シ室ノモアテスハウ

トニキ供馬ラ唐临歌詞ノ句也

水キアリヤニモ候ナシテヨウトモアシム

荷方

晚春ノ笠年ニ枕火ル心モ葉も伴首ハ雪日ノ

弓ト消タリ道ノ字ニ承キト言約白之

羨メ子草一生のと自らのや

破人

夏ノ日ノ詠此格タル儀モヨシと詠昨日ト思フ退
居ヲ五日而後各ハ歎也羨メ子草トハ儀ニ

拿ト言菌ニテ一夜ニ生ル革也

絹鷗う氣ハ有リテ、弟ノ財シテ、理多

ム日もノツレ、ヒビキルヲ、僕人ノ絹鷗、愈ニ考タリ
絹鷗ハ利久ノ常通ノ附之、麿裏丸ノヘニテ、累
又カ改革ヲ、食ニ并ハナクトハ、伯夷カ置フ食ニ
タラシ前勺ノ菌ハ、絹鷗ヲ、考ナシノ菌ナラニ

き引のむとよあらゆり也ア

前勺革は、名主ノ長節ノコトニスミテ、加ニキ。

流毒アリ、是事御如く、あらん

前勺開器用ヲ附ナリ、但当う要、扇ヲ思ヘシ

若吉トノ、能ヨリナシ

且葉

き引のむとよあらゆり也ア

脚傳毛毛源ヲ、上、解ヨリ、足苦キヨリ、脚毛モヤフ
取手ニ

むき毛アリ、又弟、弟アリセテ、ハ、多々

後傳毛根を、ムサホリニキスキル人、傍信号ニアリ

近ニねも、一、度、き、あ、し、ル

研人

前勺ノ人、脚傳毛ニ、毛附ヲ附ナリ、但当うノニ、ねモ、モ
字ハ、帛ニアタリ、ルモノ、字ニアラス、近ノ、為ノモノ、
家也、産ノタニ、ニ、是ハ、毛カ有テノコ也

角、母、の、高、と、糸、と、よ、豪、修、る、且葉
毫ノ革、圓ト、殊タリ、風、風、向、色、は、其、豪、ハ、高、く、字、二、曾、
備ノ字、三、教、ニ、ツル、心、ナリ

豪、す、ば、お、く、る、衣、く、の、日、

聖、也

前々の人に向かひ着服を用ひ奉り送りナカラ道ノ
御ニシテナリ朝ノ字ニ有ヒキナリ

風りぬき秋の日暮よ廻入る 荷芋
あら群れ在候ア風ノナキト文テ甚五スカラノナクサモ
但板木モ甚暮ニテアキタルノ白ニテ甚ナクサニコドリ
ヤエニモヤウ一段ヨシ

手取の湯の浦 畏々のア

ハト音ヲ候海辺ハナク深きカリ五也島羽ハ
志州ニテ日本ノ物岸ノ言語も通能事無シサマ
くも浦モアラ

ア内ア難シ森能度モ又モ正る 暮も

翁ニト言ヨリカニキ物ヲ名ニテ名而ノ對附ト
テニタリサコニハ人少日ツクニハ日百二句ハ浅モ
サニレラ日見タルカ鳥羽ノ浦ハニミニズト言心ニテ

禁ニ行ストノロニ

アリ一教聲の名もナリ 荷芋

近西イフヌ多ク人レシテ獨身ノ福商スル被恩ヲ
除ヌリ聲ト言字苟ウヘ教ヒテ也

被 声の名もナリモ多クて 犬人

鷹者トコレニテ、あノ字ニ狹狹カノ上見エテ聲ト言
ミモサヒニキヨ

餉を含りシヌモ耳ノ代 茶葉

前句ニラメヤカモサニヨリ太平ノ世ヲ除メリ貪ツ
ト言マノテニハニ餉とニ喰フミアリ並船、匂ハカリ
有タレ

山 ハモル時、鳥聲より日暮 夜文

居カ代ニ移すと匂ニテ餉上已ノ事ノ後ニナシタリ

くまくら まくらめ まくらを まくらの まくら

山ハ花ト草木ニ遍り見上タリ候豆ハ老茎新芽
トノノヤニ屋ノ宿ト老葉ノ候ヲ前々ヘツナキタリ

橋註源氏物語卷之二

その日のまた

